

# 桜川を遡上するサケを観察し卵を採取しました

～第6回千波湖環境学習会～

第6回目となる千波湖環境学習会は、昨年11月26日に「桜川に遡上したサケの産卵活動の観察や産卵調査を体験してみよう」をテーマに開催しました。

桜川でサケの遡上が初めて確認されたのは平成17年で、以降遡上時期に合わせて11月になると水戸市の協力で桜川下流に設置されているラバー堰の柳堤水門が下げられ、毎年遡上が確認されています。

当日は、水戸市役所に集合、開会式の後、出発前に先生方から「サケクイズ」が出されました。難しい問題も幾つかありましたが、子どもたちが次々と手を挙げて答えていき、20問全部で正解が出て、皆さんニコニコで出発です。

近くの美都里橋へ移動し、まず橋の上から、泳いでいるサケを観察、産卵に適している砂利底付近に陣取るメスのサケを観察することができました。桜川に遡上している様子を初めて見たという参加者は、力強く泳ぐ姿を見て驚いていました。

河川敷に降りると、ホーリーくんがサプライズ登場！全員での写真撮影、サケの生態の説明を受けた後、いよいよ卵の採取です。子どもたちが川の中に入って網を並べ、上流側で協会職員が砂利や石を動かして、流れてくる卵を採取しました。今年は、昨年同様サケが全国的に不漁で、桜川を遡上してきた数は少なく、卵が採取できるか心配でしたが、受精卵で生きている状態のものが採取できました。子どもたちは長靴の中に入る水の冷たさも忘れて頑張っていました。

翌週に当協会職員が調査したところ、約400個の受精卵が採取され、現在、飼育中です。

2月4日の学習会では、孵化した稚魚を放流しますので皆様ご参加ください。

最後に、参加者の皆様に飲料を提供していただいたマプラス様、いばらき環境改善合同会社様及び寒い中参加していただいたホーリーくんにお礼申し上げます。



# 千波湖周辺のジオパークを学びました！！

～第7回千波湖環境学習会～

第7回目の千波湖学習会は、「千波湖周辺のジオパークを調べよう」をテーマに昨年12月17日に開催しました。40名の参加者が、偕楽園でみられる地層を観察しながら、水戸の台地や千波湖の成り立ちと、地質と人々との関わりの歴史について学びました。

始めに講師の茨城大学名誉教授の天野一男先生から「茨城の県北地域※では5億年前から現在に至る大地の変遷をみることができ、その中で千波湖周辺では最も新しい時代のストーリーをみる事ができる」との話の後、偕楽園へ向けて出発しました。



南崖の洞窟

身近な地質を活用した知恵に感動



吐玉泉の湧水を調べました

株式会社ジーエスケー茨城様にお礼申し上げます。

※茨城県北ジオパークは、茨城大学を推進役として県北・県央地域の市町村等が天野先生のご指導のもと平成23年日本ジオパークに認定され活動してまいりましたが、再審査の結果、残念ながら平成29年12月に認定が取り消されました。



ジオパークの説明を聞く子どもたち

最初のポイント「南崖の洞窟」では、水戸の土台となっている泥の地層を観察しました。この地層は、地球が現在より温暖で海面が高く水戸の周辺が海に覆われていた約600万年前に海底に堆積したもので、緻密で水を通しにくいいため、江戸時代にはここから切り出された岩石が水道管の材料として使われ「笠原水道」が敷設され、飲み水に困っていた下市の人々の生活を潤したとのことでした。偕楽園斜面に位置する「吐玉泉」では、泥の地層が不透水層となり水が湧き出すしくみや、湧水が弱酸性であるため大理石が溶けることを学びました。千波湖が一望できる「仙奕台」では、氷河期の海水準変動等と関連した千波湖の成り立ちについて学び、おさらいのクイズに挑戦しました。

学習会では、地質関係は初めて取り上げるテーマでしたが参加者は熱心に耳を傾け質問をしていました。

講師の天野先生、飲み物を提供いただきました



仙奕台でクイズに元気で回答！